

文化・芸術

名画の扇

大川美術館企画展から

「私はデザイナーを云はず、民族資料、ロシア美術家とは呼びたくない。本当に良い意味の職人こそデザイナーであるような気がする。しかし職人というのはがん困なものだ。こういうがん困さは時代の価値観からみるとどういうことになるだろうか。やっぱり、どんな時代が変わるとデザインがヒューマニズムを失ったり、正しい価値が黙殺されていよいはずがない」。つねに新しい価値観を提示しつづけた亀倉雄策の言葉は、今を生きる私たちに示唆的です。

亀倉は、ピカソ、イサム・ノグチ、梅原龍三郎などの絵画や彫刻のみならぬ私たちに示唆的です。この布たちは、亀倉の仕事を

亀倉雄策（1915～97年）

特別出品「萬倉コレクションの布」展示風景から
「横縞布(ポートランド・ブランケット)」
20世紀、羊毛 140・0 cm × 260・0 cm
「横縞布(北欧・ブランケット)」
20世紀、羊毛 184・0 cm × 228・0 cm
「横縞布(ボーランド・ブランケット)」
20世紀、羊毛、麻 140・0 cm × 220・0 cm
(左からすべて桐生市蔵)

